

教頭の小部屋

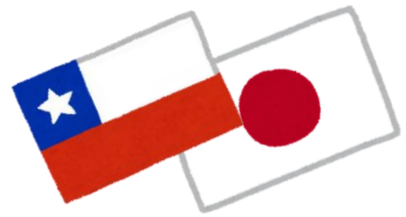


2020.12.16
その3

相手のことを考える

テレビを見ているとチリの居酒屋さんの様子が映し出されていた。その居酒屋でのチリ人の立ち振る舞いに、思わず感動し、いろいろと気づかされたことがあった。

チリ人は陽気だ。どんなにつらいことも、笑い飛ばしてしまう明るさがある。チリ人はお互いを助け合う心の広さがある。「ありがとう。」「世話になったね。」「すまないね。」という言葉には、「何言ってるんだ、同じチリ人だろ。」と言葉を返す。もちろんチリ人がすべて同じではないと思うが、チリにはそんな国民色や気質があるらしい。それはチリのこんなことわざにも表されている。



『今日はあなたのために。明日は私のために。』

「まず自分」ではなく、「まずあなた」なのだ。そういえば2010年、チリの鉱山であった落盤事故もそうであった。地下700mに69日間も閉じ込められた33人の鉱夫たちは、少ない食料を分け合っていたそうだ。やがて人ひとりが通れるほどの救出穴が開けられ、一人ずつ昇降機で地上に出られることとなった。鉱夫たちはその順番も譲り合ったそうだ。最後の一人が生還したニュースは、奇跡の救出劇として、そのチリ人氣質と共に世界に広まった。

現代、私たちが暮らす日本は『発信』『自己アピール』の社会になってしまった。自分から発信しないと繋がれない（繋がりにくい）世の中になったのだ。自己アピールや発信が悪いわけではない。しかし、その発信の度が過ぎると、信頼を失ったり、ペナルティを課せられたり、非難を浴びてしまう。いわゆる「バカッター」などは、その最たる例であろう。そこまでいなくても、ネット上に書き込んだり、動画像をアップしたことで、友人とけんかになったり、人間関係がぎくしゃくしたことはないだろうか？もしそういう経験がなくても、自分が気づいていないだけで、自分のせいで傷ついている人がいるかもしれないし、ネットを介していなくても自分の発信（言動）で傷ついている人がいるかもしれないということを忘れてはいけない。

発信型社会の基準は、どうしても『自分』になりがちである。何事も自分基準で判断してしまうため、トラブルが起こりやすい。そこでよく使われる言葉は「そんなつもりはなかった。」「冗談だった。」という言葉であるが、この言葉は「相手の気持ちを考えていませんでした。」という言葉の裏返しなのである。君たちは「面白ければいい。」「ノリで・・・。」と学校生活を雑に過ごしていないか？人間関係を雑に扱ってはいないだろうか？自分基準の生活になってはいないだろうか？

現代の日本は発信・自己アピールの社会になったと書いたが、昔はそうではなかったのである。日本が美德とする文化には「相手基準」、よは「相手を尊重する。」という考え方が根底にある。それは東京オリンピック招致の際、世界に広まった『おもてなし』にも通ずる。また、「謙虚」「縁の下の力持ち」「ひかえめ」等、日本には積極的に発信しないことを美德とする文化があった。『奥ゆかしい』である。今の日本ではあまり使われなくなり、時代に流されようとしている文化なのかもしれないが、私たちが失ってはいけない大切な文化である。そんな日本人氣質は、決してチリには負けない。日本が世界に誇れるものでもある。

勉強、部活動、塾等々、日常の慌ただしさに追われる中で、何事もつつい自分基準に考えてしまいがちであるが、「相手の気持ちを考える心」を大切にしてほしい。

いじめ生活アンケート

先日実施した、いじめ生活アンケートの結果を見て気になる事がありましたので、書き留めておきます。

まず1つ目。友人との関係の中で、冗談で済む範囲ってあるよね、確かに。でも、その範囲ははっきりと線で区切られている訳じゃないし、結果、トラブルが起こったときに「冗談のつもりでした。」ってみんなからよく聞きます。ちなみに「いじめ」って言うのは、いじめられている人が、「嫌だ」と思った時点でいじめになるんです。だから、受け取る側の気持ちが大事なんです。「嫌だ。」と言ってくれないと、相手の気持ちは、はっきりとは分かりません。もしかしたらニコニコ笑って「嫌だ。」という気持ちをごまかしているかもしれません。もしかしたらあなたの事が怖くて「嫌だ。」と言い出せないかもしれません。冗談の範囲もその人との関係によって変わるだろうし、人の心は目に見えない。だから顔も見えないネット上での言葉のやり取りなんて、本当にトラブルに繋がるケースが多いです。だからこそ、相手のことを考える事がホントに大事。人間関係は大人でも難しいもんです。失敗もします。私も調子乗りなので、私の言動に「おい！今のはないぜ！」と不快に思われた方も多くいると思います。ホントにごめんなさい。それはさておき、人との関係には「気の置けない関係」という言葉もあれば、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉もあります。友好的人間関係を築く為には、どちらも必要なことです。でも、どちらかと言えば、後者をまず優先させるべきだと、私は思います。使い古された言葉ですが、まず、相手の事を考えて人と接するように心がけてください。

そして2つ目。「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか？」という質問について、「どちらかといえばそう思う。」と答えた子が、意外に多かったことに驚きました。ズバッと答えると、「どちらかといえば」ではなく、どんなことがあっても「いじめはアカン。」のです。いじめは、いじめた人が100%アカンのです。人には必ず欠点があります。その欠点は、「勉強が苦手」「運動が苦手」「言葉がキツイ」「人と上手く繋がれない。」など、様々でしょう。欠点のない人はおりません。そんな当たり前の事が原因って、やっぱりおかしいのです。「どちらかといえばそう思う」という回答は、「場合によってはいじめられてもしょうがない。」という裏返しにはなりませんか？そして「自分がいじめられても仕方がない。」ということでもあるのです。う～ん、やっぱりおかしい。結論、どんなことがあってもいじめはアカンのです。

「いじる」もやがて「いじめる」に
繋がっていくかもしれないんだな...

